# 忘れじの君へ

玖鴎燎助

聞いたことのある、懐かしい音で目を覚ました。
いつも寝起きに襲われるような倦怠感は不思議となく、体は何時にも増して軽かった。昨日何かしただろうか、と思い出そうとしたが、記憶を引き出すことはできない。
どうにも頭の中が空っぽな気がする。体が軽いのはそのせいだろうか。
ああ、それよりも、先ほどから煩いくらいに鳴り響くこの音が邪魔だ。生き物の鳴き声のようだが、どこで鳴っているのかも定かではない。
それどころか、音の主を探して見回せば、あたり一面真っ白ではないか。
「なんだ、ここ」
奇妙なことが続く中、ようやく鳴き声の正体を見つけた。
この空間の中では見失ってしまいそうなほど真っ白な体と、やたらと細い二本の黄色い脚、頭に乗っかる真っ赤なトサカ。音を発しているが、よく見れば体はフェルトのようなものでできている。とても生き物とは思えない。
そしてよく聞いてみれば、一般家庭では馴染みはないが、テレビでよく聞くやかましい音だ。
「にわ……とり……？」
見れば見るほどどこまでもぬいぐるみなそのソイツは、やたら生々しい鶏の鳴き声を放ち続ける。
一しきり鳴き終えたのか、或いは奇異の視線を向けるこちらに気が付いたのか、鳴くのをやめると、首をぐりんと回してこちらに向いた。
「やあ、随分寝坊助ですね。待ちくたびれましたよ、お坊ちゃん」
顔面もやっぱりフェルト気味の鶏から、随分と深みのある声が聞こえてきた。
「あー、誰だ？」
「失礼、申し遅れました。私、この度貴方様のナビゲートを務めます、鶏です」
「見ればわかる」
折り目正しい挨拶とともに、わかりきった名前を名乗る目の前の鶏。どうやら随分と実感のある夢を見ているようだが、それにしてもナビゲートとは何事なのだろうか。
そんな鶏が「ついてきてください」と歩き出すので、仕方なくそのあとをついていく。
どこまでも真っ白な空間の中で、ちょこまかと脚を動かす鶏を見下ろしながら進んでいく。
「で？　なんで鶏がしゃべってるんだ？」
「寡黙な人間がいらっしゃるならば、饒舌な鶏がいても不思議はないかと」
「人語をのたまう鶏は空前絶後の不可思議だ」

噛み合わない会話に辟易しながらも、代わり映えのしない空間をひたすら歩き続ける。
歩くたびにきゅうきゅうとなる鶏は、子供の履くおもちゃの靴のようだ。耳障りだが、道が分からない以上ついていくより他にない。
その時、ふと後ろで携帯電話の着信音が鳴った。
「あ？　……あぁ？」
その音に誘われるように振り向くと、そこには真っ白な空間はなく、代わりに広がっていたのは見覚えのある薄汚いワンルームだった。
カーテンが閉まった暗い部屋は、掃除もしていないせいか埃っぽく、そこら中にごみがまき散らされている。碌な片づけもしないせいで、私物とごみの区別もつかない。
その部屋の真ん中で寝転がっているのは、まぎれもなく自分自身だった。
「俺がいる。それに、ここは……」
「貴方様のお住まいにございますな」
足元から聞こえたのは、先ほどまで先導していた鶏だ。相変わらず動いているのが不思議なフェルトの体にも、いい加減見慣れてきた。
「しかし汚いお部屋ですな、鶏の住処のほうがよほど整頓されておりヴァッ」
踏む。
「ちょ、ダメですってこんな衝撃映像！　情操教育によろしくありませんて！」
「誰も見てねぇよ」
踏むたびにきゅうきゅうとなる鶏は、実に踏みがいのあるおもちゃだ。
しかし、いつまでも踏んでいるわけにはいかない上に、何故か罪悪感がこみあげてきたので、足を上げた。
「で？　俺の部屋なのはわかるけど、なんで俺があそこにいるんだよ」
「ウゥン……まあ、夢ですからね」
納得がいかないが、言い切られた以上この鶏には説明する気がないのだろう。諦めて相変わらず寝転んでいる自分に目を向ける。
随分最近の記憶なものだから、こうしてみれば今でもはっきり思い出す。確か前日は酒を飲みながらつまらないテレビ番組を見て、気が付いたら薄く硬い布団の上に寝転がっていたはずだ。
この頃、夜は毎日毎日その調子だった。いや、それを言うなら、この町に来てから俺はずっとそんな生活を続けている。その日暮らしのような生き方で、碌に稼ぎもないままボロアパートに住んでいる。
そしてこの電話は確か……
「ん……うるせぇな、誰だよこんな時間に……」
『こんな時間』なのはお前のほうだ、と今の俺なら怒鳴っているだろうが、そんなことはど

うでもよかった。どうせ今日でなかったとしても、明日か明後日には同じ用件の電話がかかってきていたに違いない。
野暮ったく起き上がった俺は、枕元の携帯を手に取ると、通話ボタンをプッシュした。
「あー、もしもし……」
『「もしもし」じゃないわ、この馬鹿野郎！　今何時だと思ってやがる！』
怒鳴られた目の前の俺は、寝ぼけ眼をこすりながら、頂点をとっくに過ぎた時計の針を見て、まるで『やっちまった』と言わんばかりに顔を歪めた。
「えー……一時の、三十八分ですね」
『おうそうだな、お前が日本にいるならその時間のはずだ！　それじゃあ次はお前の今日の出勤時間を言ってみろ！』
「今日は……昼前の十一時に出勤予定でした」
『お前は一体いくつになれば時間を覚えられるんだ！？　ああ？』
この時の俺は何を怒鳴ってるんだ、と思っていたが、第三者の視点になってみれば向こうの怒りは正当である。というよりも、俺が単純に酷すぎるだけの話なのだが。
『お前の代わりなんていくらでもいるっつったろ？　もう金輪際この店に顔を出さなくていいぞ！　それじゃあな！』
強制的に唯一の収入と、電話を断ち切られた。前後がはっきりしないが、確かほんの数日前の出来事のはずだ。
そんな当時の俺は、切られた電話を恨めしそうに睨むと、布団の上に投げ捨ててテレビをつける。弁明をするつもりも謝りにいくつもりもないらしい。
「ふむ、ここで一つ感想をば」
「とんだクズ野郎だな……」
「貴方様自身ですがね」
落ち着いた声で余計なことを口走る鶏。フェルト生地なのがより一層憤りを掻き立てる。
「分かってるよ」
それだけ言うと、興味もなさそうにテレビを眺める自分の隣に座り、その無気力な顔を覗き込む。
髭もそらずに伸ばし放題で、寝起きだろうと関係なくぼさぼさの頭髪。どこに焦点があっているのかもわからない半開きの目を見つめながら、今の自分もこんな顔をしているのだろうか、などと無駄な感慨に浸ってしまう。
そばの小さなちゃぶ台に頬杖をつきながら、何をするでもなくテレビを眺め続けている。自分のことだとわかっていても、その無駄な時間に腹が立つ。自分にはそんな立ち止まっている時間もないのに。

――はて、果たして自分は何をそんなに焦っていたのだろうか？

「無気力で自堕落な自分自身。果たして貴方様はそれでよろしいのですか？」

まるで見透かすような質問を投げる鶏。そんなことは、言われなくてもわかっている。

「俺は何をすべきなんだよ。生きるために稼いでる。それだけしかしてないけど、それだけで十分じゃねぇか」

「それで十分だと思っていないのは、他でもない貴方自身では？」

間抜けな顔をしながら、ずけずけと人の心に入り込んでくる。それが腹立たしかった。

苛立ち紛れに勢いよく立ち上がると、その部屋を後にしようと出口に歩き出す。いつまでも無気力な自分を背に、どこかやりきれない気持ちのままその場を去った。

◆◆◆

「おばーちゃん！」

部屋を出た途端、目の前に広がっていたのは長閑な田舎の一軒家だった。

急いで振り返ってみるも、そこには散らかった部屋はなく、どこまでも続く木々と、夕焼けに染まる真っ赤な山々だけだ。

もう一度前に向き直る。畑に隣接したその家は二階建てで、庭には家畜として飼われている動物たちと、腕白そうな男の子が一人いるだけだ。

「こぉら、浩太ちゃん。そんな泥だらけになるまで遊んでぇ」

そんな男の子をやさしく叱っているのは、八十を超えていまだ元気に畑を耕している女性だ。

「夕ご飯前なんだから、さっさと体洗ってきんしゃい」

「はぁい」

適当ながらもしっかりと返事をして従う男の子は、まぎれもなく幼いころの自分だ。そして、それを叱っていた女性も、見間違うはずもない、自分の祖母であった。

「小学校時代から高校卒業まで、母方の祖父母の家に住んでいたようですね」

またしても当然のように足元から話しかけてくる鶏。ナビゲートと称するだけあって、こちらの事情には詳しいようだ。

「幼いころの貴方様は、随分と素直でかわいらしいですね」

「ガキの頃なんてもんは大体そうだろ」

きゅうきゅうと鳴る鶏を従えながら、懐かしい実家へと歩みを進める。

靴を脱ごうとしたが、ふと思いとどまり、中には入らず縁側に腰掛けた。背中に懐かしい家族の音を聞きながら、暮れていく夕日を眺めたくなったのだ。

特に何も言わず、隣に腰掛ける鶏。庭を走り回るリアルな鶏の見た目と相まって、隣のぬい

ぐるみがより一層滑稽に映った。
「……何を笑っておられるのです？」
「いや、別に」
思い出した。真っ白な空間で目覚めた時、何故鶏の鳴き声を懐かしく思ったのか。
高校を卒業してからこの町を出るまで、俺はずっとあの声を耳にしていた。聞き覚えがあって当然だったのだ。
ふと振り返ると、食卓に座っているのは、母と祖母の二人だった。
「浩太ちゃんは元気があっていいねぇ」
「うるさいだけよ、あの子は。本当に腕白なんだから」
呆れ果てる母を尻目に、朗らかに笑う祖母。そんなだからあの子が調子に乗るんだ、と口を尖らせる母だが、それでも祖母は相貌を崩すばかりである。
「さてさて、そろそろ夕ご飯の支度でもしようかね」
そういって立ち上がる祖母。それを見て苦虫をつぶしたような顔をしたのは母だ。
「母さん、またアレやるの？」
「何言ってるの、誠一さんにも精力付けてもらわないといかんでしょ？」
「それはそうだけど……。あれ、私苦手なんだけどなぁ」
「茜ちゃんは愛着あるものねぇ、仕方ないとは思うけど」
そんな話をしながら奥へ引っ込んでいく祖母。それを見送る俺と鶏だが、ふと鶏がこちらを見上げた。
「して、アレとは？」
まあ、どうにも的を射ないのは確かだろう。なので当然の提案として、俺は祖母について行ってみればいいと言ってやった。
「おばあちゃんについていけば、アレが見れるぞ？」
「ふむ、では暫し失礼を」
きゅうきゅうと音を鳴らしながら祖母の後をつけていく鶏。その反応を楽しみにしながら、もう一度、懐かしい山々の風景に心を傾ける。
この雄大さが当たり前だと思っていた。ビルと人と騒音に埋もれた都会の中では、この空気も、この景色も、この心も、どこにもありはしないものだった。
それでも、自分はこの場所を手放したのだ。何かに引き寄せられたのか、背中を押されたのか、いずれにせよ何らかの理由を持って。恐らくは、この雄大さを代償にしても得たい何かを探して。
それが一体なんだったのか、記憶の抜けた自分にはわからないけれど。
このままあの鶏についていけば、いつかは見つけられるだろうか――

ちなみに全くの余談ではあるが、祖父母宅で飼われている鶏は食用である。
そしてこれも全くの余談ではあるが、その晩のメニューの一つは焼き鳥であった。

山々も静まり返り、虫の鳴き声が聞こえるだけの、本当に静かな夜だ。
都会ではお目にかかれないほどの満天の星空と、見渡す限りの暗闇。星と月の明かりだけが照らし出す、本当に長閑な田舎の景色だ。
「ふむ、ここで一つ感想をば」
「血抜きはやさしくお願いシマス……」
綿の詰まっていそうな首をぐるんぐるんと回しながら、目を虚ろにして呟く鶏。
夕餉の支度を終えた祖母と一緒に帰ってきた鶏は、この顔のままぼーっと縁側に座っていたので、思わず吹き出してしまったのだ。
居間には祖母と母、そして父がいるだけだ。子供の俺はというと、トイレにでもいったのだろうか、この部屋には見当たらない。
ショックで固まったままの鶏を置いて、家の中へと入っていく。
何の気なしにテレビの前を横断してしまったが、祖母も母も父も、自分など見えていないようで、相変わらずテレビ番組を視聴中だ。夢の中だから当然とはいえ、どうも不思議な感覚だ。
居間のほうにはテレビがついていたが、居間から一歩出ると、途端に音のない静かな空間になる。明かりも部屋から漏れるものだけで、廊下は暗く静まり返っている。
自分を探して、暗い廊下を歩きまわる。
どれも懐かしいものばかりだ。台所から見える母や祖母の背中も、傾斜が急で上りづらかった階段も、祖母や父が耕した畑も、何もかも記憶の詰まったものばかりだ。
そんな風に歩き回っていると、ちょうどトイレの前で水の流れる音がした。恐らく子供の時分だろう。
案の定、トイレから出てきたのは子供だった。その足の先はまっすぐ居間を向いていたので、俺も習ってそのあとをついていく。

「浩太。おるんかい？」

その時、ある部屋の中から声がした。消え入りそうなほど小さく掠れた声なのに、何故かよく通って聞こえた。それは目の前の子供の俺も同じらしく、声のする部屋のほうを向いた。
「いるよ、おじーちゃん」
そう答えながら、襖を開けて中に入っていく自分。それを後ろから眺めながら、暗がりの中

でなんとか目を凝らして部屋を見た。
家の中の襖で、この部屋のものだけは少し意匠が異なっている。誰よりも空が好きだった祖父のために、月や雲といった空のイメージが描かれている。ここはまぎれもなく祖父母の部屋だった。
子供の自分に続くように部屋の中へ入っていく。
月の明かりに照らされた部屋の中は、わざわざ明かりを点けずとも暗闇に沈むことはない。青白く照らされた室内には、寝たきりになっている祖父の姿があった。
和風な家屋の中では異彩を放つ、機械仕掛けのベッド。一人で歩き回ることはできないため、様々な機器がベッドに備え付けられている。そんなベッドに走り寄る子供の俺を、祖父はやさしく微笑みながら迎えてくれた。
昔から、祖父の暗い顔なんて見たことがなかった。いつも柔らかな笑みを浮かべていて、その声もやさしく響いていた。重い病気だと聞かされていたが、そんなことを感じさせないほどに祖父は穏やかな人だった。
そんな祖父に呼び止められた子供の俺は、祖父に頭を撫でられながら、祖父のやさしい笑顔を見つめていた。
「どうしたの、おじーちゃん？」
そう問いかける俺に、祖父はやさしく、やさしく語りかけてきた。
「浩太は本当にいい子だよ。本当に、私はいい孫をもった」
声をかけられながら、懐かしい、昔の記憶が段々と蘇っていく。
「浩太、これからおまえはたくさんの人と会って、たくさんのことがあるよ」
嗚呼、やさしい、どこまでもやさしい声色で、祖父は語りかけてくる。
「悪いことも、悪い人も、生きていればたくさんある。けれどね、浩太。浩太は曲がっちゃいけないよ。まっすぐまっすぐ育っておくれ。素直で優しい子に育ってくれれば、おじいちゃんはとっても嬉しいんだ」
祖父の声が、染み込むように胸を打つ。果たして今の俺は、祖父の期待に応えられるような、いい子に育っているのだろうか？
「うん、分かったよおじーちゃん」
「そうかそうか、本当に浩太はいい子だねぇ」
月に照らされる孫と祖父。その姿を少しの間眺めると、祖父母の部屋を後にした。

襖を閉めたところで、壁にもたれかかる鶏を見つけた。
「どうでした？　久しぶりに会ったお爺様は」
まるでこちらのことをわかっているかのような問いかけ。だが、初めほどの苛立ちは、不思議と感じなかった。

「胸が痛いよ。責められたような気分だ」
「もう会えることもないのですから、もう少し顔を拝見してからでもよろしいのですよ？」
鶏は、こちらを慮るようにそう言った。
祖父は俺に言葉を託した翌日から意識不明になり、その一週間後には帰らぬ人となってしまった。まるで、その言葉だけで悔いはなくなったとでも言うかのように。
結局俺が祖父の期待に応えられているのかどうかは分からず仕舞いだ。それでも、昔の祖父にいつまでもすがっている訳にはいかない。いつか誇れる自分になるためには。
「いや、いいよ。おじいちゃんの顔を一目見れただけで十分だ」
「ふむ、そうおっしゃるのであれば」
そう言ってきゅうきゅうと歩き出す鶏の後を追う。ただ、もう一度だけ祖父母の部屋を見る。中からは俺と祖父の話し声が聞こえてくる。
何を話したかはうろ覚えだが、あの言葉さえ聞けたなら、もう大丈夫だ。
少しだけ名残惜しいが、懐かしの育ちの家を後にした。

◆◆◆

いつからだっただろうか。何かを決める時、人の意見に流されやすい性格だと気付いたのは。
中学校の時、友人の口車に乗せられてクラス委員なんてものをやらされたし、高校受験の時には友達の話を鵜呑みにして進学先を決めたこともあった。
優柔不断はこの際置いておくにしても、どうにも人の話を聞きすぎる性分らしい。それでも損をしないように生きようとするあたりは、まだ強かと前向きにとらえるべきか。
高校の時に所属していた演劇部も、高校でできた友人に誘われるまま入部したものだ。それまで対して演劇に興味もなかったくせに、こうして役者をしているのだから不思議なものである。
今俺がいるのは演劇部の部室だ。発声練習をする自分を見つめながら、高校時代の記憶を必死に引き出していた。
「あーあ、なんで俺はこんな思い出の場所めぐりなんてしてるのかねぇ？」
今更のような悪態も、聞く人間はいない。ましてや、今までナビゲーターだのなんだのと言っていた鶏もいないとなっては、本当に行く当てがなくなってしまった。
懐かしの祖父母宅を後にし、気付けば高校にいた。そこまではよかった。
自分の部屋から祖父母宅までの移動もそんな感じで進んだもので、こういう仕組みなのだと思ってしまえば問題はなかった。
問題は、今まで後ろをついてきていたフェルト生地の鶏が急にいなくなったことである。
ナビゲートと称するだけあって、今まではあの鶏がなんだかんだで道案内らしきものをして

いたが、ことここに至って俺は夢の中で迷子になってしまったらしい。
仕方なく校内にいた高校生の自分を見つけて、どうにかこの場所での思い出を探っている最中である。
発声練習や筋トレ、演技練習など一通り練習を終えると、次第に部員たちははけていく。時間はとうに六時を超えて、間もなく下校時刻である。季節が冬であることもあってか、日の落ちる速度は速い。
窓の外をみると、とっくに日は沈んで真っ暗になり、家々の明かりが道を照らしている。そんな時間になっても、俺は一人部室に残って練習をしていた。
人に流されやすいくせに、やりだしたら中途半端で終われない。社会に出たらいいように使い潰されるタイプである。そんな性分を、この頃の俺は知っていても改善することなんてできなかった。
俺を誘った友人は、想像よりもハードな練習内容に早々に音を上げて退部した。しかし、誘われた俺はというと、途中で退部するのが嫌だったということもあって、こうして部活を続けている。
それでも下積みが皆無だった俺は、必死でほかの部員に追いつくため、こうして人よりも長く練習せざるを得なかった。
宿直の先生がやってくるまで練習して帰宅するのが、高校時代の俺のスタイルだった。
もちろん遅くまで残るということで、親や祖母を心配させてはいたが、それでもこうでもしなければ部活を続けていくことなんてできなかった。
そんな不器用な自分を見つめながら、馬鹿だと笑えず、むしろ打ちのめされている自分がいた。
不器用で、不恰好で、それでもこんなにも懸命で。まっすぐな自分を見つめながら、今の自分を顧みる。
適当に物事をやり過ごして、でもその方法が下手くそだから結局うまくいかない。結果として、バイトも途中で辞めさせられる始末。どうしようもない自分自身と、不器用な目の前の自分と、一体どちらがまともだろうか。
そんなことを考えていると、部室の扉が突然開かれた。宿直の先生かと思ったが、現れたのはなじみのある、できれば今の俺が会いたくない人だった。
「おやおや？　今日も精が出るね、浩太君」
話しかけてきたのは、演劇部の先輩で、既に引退した立川先輩だった。
「た、立川先輩、お疲れ様です。どうされたんですか？」
「先生に入試対策手伝ってもらってたんだよ。それで帰ろうとしたらまだ部室に明かりがついてたから、やっぱりと思ってね」
差し入れだよ、とジュースを投げ渡してくる先輩。女性ながらさっぱりとした性格で、付き

合いやすい人だった。
演技も人一倍うまく、目標の人でもあった。一年生の時、舞台の上に立つ立川先輩の演技に、心を打たれたのを今でも覚えている。
先輩と俺に見守られながら練習を終えた高校生の自分は、暫し先輩と話し込んでいた。
それを眺めながら、思い出していたことがある。誘われるまま入部のために部室に入った俺と友人を出迎えてくれたのが、この立川先輩だった。衣装合わせの最中だったのか、丈の合っていないドレス姿で走り寄り、スカートを踏んづけて派手にころんだ姿が印象的だった。
どこか抜けていた先輩だったが、人当たりも良く、面倒見もいい先輩は、部員全員から慕われていた。演技の下手な俺にも、一から丁寧に教えてくれた。
練習も誰より一生懸命で、他の部員もそれに引っ張られるようにして練習に打ち込んでいた。部長ではなかったが、周りの人間を引っ張っていた姿が、ずっと印象に残っていた。
その姿に突き動かされるように、自分も練習に明け暮れた。中途半端に終わらせることもなかったが、本気で打ち込むこともなかった自分からすれば、先輩の姿はとても眩しかった。
思い返せば、初めて出会った頃から、自分は立川先輩に惹かれていたのだろう。
先輩に振り向いてほしい。そんな下心が、なかったといえば嘘になる。ただ、それ以上に自分の中に、先輩と同じ舞台に立ちたいという願いがあった。
憧れの先輩と、同じ舞台に立てたならば、きっと演劇部に入った意味がある、と。
結局願いは叶わなかったが、それでも先輩に追いつくために、必死で練習に打ち込んでいた。
今更ながら、割と真っ当な青春を送っていたことを思い出す。
「そういえば、先輩は東京の大学にいくんでしたっけ」
大道具に並んで腰掛けながら、先輩に質問をする自分。
「うん……。少し寂しいけど、やりたいことがあるからさ」
そう言って先輩は笑う。
俺や先輩の住んでいた周辺には、残念ながら劇団のようなものはなかった。大学の演劇部もあるが、見学に行ったところ、それほど精力的な活動も行っていなかったらしい。
演劇に人生をささげた、と豪語する先輩にとって、それは耐え難かっただろう。そして先輩の夢を叶えるには、どうしても県外、できることなら中央の都市にいくことが必須だった。
それでもカラカラと笑う先輩を、俺は顔で微笑みながら、心の中では寂しい思いで眺めていた。
結局、自分では届かないのだろうか。いつまでも並び立てないまま、別れてしまうのだろうか。
そんな言い様もない焦燥感に苛まれながら、それでも先輩にその姿は見せまいと虚勢を張り続けた。いつか言葉にできると勝手な期待を自分にして、結局直接的な言葉を言うことはなかった。

話し込むうちに宿直の先生がやってきて、下校することになった。駅までは同じ道なので、自転車をおす先輩と並びながら歩く。星を眺めながら歩く二人を追いかけるように、俺も夜道を歩いていた。

「浩太君はさ、進学するの？　それとも就職？」

そんな風に問いかける先輩。自分はというと、照れてまともに顔も見られないらしく、前を見ながら答えた。

「まだ……わかんないです。演劇は続けたいですけど……」

「そっかぁ。うん、浩太君はうちの部活で一番頑張ってるもんねぇ」

「そんなことないですよ。先輩方に比べたら、自分なんてまだまだです」

「謙遜、謙遜。浩太君が頑張ってるの、他の子も見てるんだから」

ああ、そうだ。こうして話している間も、どこか晴れない気持ちで一杯だった。先輩と話すのはもちろん嬉しかったが、その時間も残りわずかと気付いてしまったから。

あと数か月もすれば、もう先輩とは会えない。それが分かっていても、あと一歩を踏み出せずにいた。

この距離感が壊れてしまいそうだった。言葉にして吐き出してしまえば、何もかも後戻りができないくらい壊れてしまう気がした。我ながら女々しいまでの優柔不断さが、結局あと一歩を踏み出させずに縛っていた。

それでも、いつか彼女に想いを伝えられたなら。そんな他人任せな感情が邪魔をするばかりだった。

光陰矢の如し。気付けば冬の厳しさは過ぎ去って、季節は春を迎えようとしていた。

◆◆◆

『朝ノ宮駅、朝六時三分発の電車で東京に行ってきます。もし良かったら見送りに来てね』

そんなメールを受け取ったのが前日だったのは、幸か不幸か。当時の俺は結局一睡も出来ないまま時間を迎えてしまった。寝坊せずに済んだことは済んだのだが。

空が青白く夜明けを告げる頃、自分は必死で自転車を走らせていたはずだ。そんな自分を、ひと足先に駅で待ちわびる。

切符はとうに買っているのに、改札前で立つ先輩の横で、改札に腰掛けて自分の到着を待つ。こうしている間も、結局鶏は姿を見せなかった。

午前五時三十分。朝日も眠る早朝から、スーツ姿の人々を飲み込む改札たち。そのまばらな人の中に、先輩はいた。

大きな荷物といくつかの小さな袋を持って、少し厚めに着込んでいる。朝はまだ冷えるようで、ホットの缶コーヒーを両手で持ちながら待っているようだ。
当時もそうだったが、他の見送りの人を見かけない。先輩に限って誰もこないなんてことはないだろう、と不思議に思っていたのだが。
暫し待ちぼうけを食らう。もっと死ぬ気で漕がないか、と見えない当時の自分に発破をかけながら、ふと先輩を見やる。
缶コーヒーをちびちびと飲みながら、しきりに腕時計で時間を確認している。そんなに気になるなら構内で待っていればいいのに、何故だかそこから頑として動く様子が見られない。
よくよく考えれば、白い息を吐きながら缶コーヒーで暖をとるよりも、ホームにある待合室のほうが、暖房もあって風もさえぎられていて暖かいはずだ。なのに、どうして先輩はここで待ち続けているのだろうか。
そんな風に考えていると、漸く自分が到着した。片や寒さを凌ぐためにホットコーヒーを飲んでいるのに、片や汗だくでぜぇぜぇと肩で息をしている。なんとも面白い光景だ。
「ちょ、ちょっと！　浩太君、大丈夫？」
駆け寄る先輩に「大丈夫です」と、全く大丈夫に見えない格好で口にする。息を切らせて汗を垂らす姿はなんとも言い難い。
「なんとか……ハァ……間に合いました……ハァ……」
「まだ時間あるよ。そんなに急がなくても良かったのに」
「でも……間に合わなくて……見送りができないのは……ハァ……嫌ですから……」
我ながら健気な姿だ。そんな自分に微笑みながら、先輩は「ありがとう」と言った。

ホームで電車を待つ間、自分は先輩と話し込んでいた。俺が入部してから、これまでのこと。練習のこと。文化祭のこと。合宿のこと。部活の話だけでも、話題には事欠かない。それだけの時間を、俺も先輩も費やしていたのだ。
「結局、先輩と同じ舞台には立てませんでしたね。それだけが心残りです」
「私も残念だったなぁ。浩太君と一緒に出てれば、きっと楽しかったのに」
朗らかに笑う先輩。そんな笑顔も、あと少しすればお別れだ。
せめて悔いが残らないように、できる限り話を続けた。それ以外に伝えたいこともあっただろうに、最後までそれを言うことをためらった。関係が壊れることも怖かったが、何よりも、別れの時に言葉にするのはなんだか卑怯な気がしたからだ。
「ねえ、もし良かったら浩太君も同じ大学に来なよ」
「――え？」
突然の先輩の言葉に、少し耳を疑った。先輩が誰かをこんな風に誘うのは、初めて見たから

だ。
「私も、もっと君と一緒に演劇がしたい。同じ大学なら、一緒にできるでしょ？」
当時の俺は、頭が真っ白になった。一緒にやりたいと思っていたのは自分だけだと思っていただけに、その言葉は嬉しい衝撃だった。
「実は私ね、一度だけ演劇やめようと思ったことがあるの」
「え？　先輩が？」
そういって目を伏せる先輩の次の言葉を、自分は黙って待つことにした。
「二年生の冬だったな、お母さんが病気で倒れてね。それで、家事もしなくちゃいけないし、勉強だって今まで通りしないといけない。それに合わせて部活までできる余裕がなくなっちゃって。優先順位決めちゃったら、やっぱり演劇を切るしかないな、って思ってさ」
覚えている。三学期の終わり頃、先輩が部活に来る頻度が極端に少なかった時がある。進級したころにはいつも通りの先輩に戻っていたからあまり追及もしなかったが。
「それでも、やっぱり演劇は好きだったから、暇があれば部室を見に行ってたんだ。諦めが悪いんだなぁ、私は」
ばつの悪そうに笑う先輩を見ながら、当時のことを思い出していた。
自分の居残り練習が見つかったのが、確かその時期だ。必死で練習していたのを先輩に見つかって、恥ずかしかったのを覚えている。他人よりも長い時間費やして、結局舞台に立てないのだから、自分にとってはやりきれなかった。
練習が終わった時間に来る人間なんて宿直の先生ぐらいだろうと高をくくっていたのが誤算だった。漸く本気で打ち込めるものを見つけたと、居残り練習を始めたのだが、人に見られることは全くの予想外だった。
「そっか。それで先輩に見つかっちゃったんですね、居残り練習」
当時の俺も同じことを思い返していたのか、そんなことを言った。それを聞いた先輩は、やさしげに微笑む。
「そう、誰もいないと思ったら明かりがついてて、まさかと思って部室のドアをそっと開けたら、君が一人で練習してた。部活の時間にだって一生懸命な君が、終わった後も残って練習してた。それが印象に残ったんだなぁ」
「でも、結局成果はでませんでしたけどね。無駄だったかもしれません……」
「そんなことない。冬の終業式前の舞台にはしっかり主役してたじゃない。思った通り大成功だって、部長喜んでたでしょ？」
少し結果が出るのが遅かった、とは言わなかった。そこまで望んでしまうのは、積立のない自分からすれば我儘だっただろう。
「それに、その姿に励まされたんだよ、私は」
「俺に、ですか？」

「うん。最初友達に誘われてきてたから、多分長続きしないだろうな、って思ってたんだ。なのに、気が付けば他の誰よりも必死に演劇に打ち込んでた。そりゃあ他の部員は小学校、中学校から演劇に興味のある人ばっかりだったから遅れちゃうのは無理もないけど、それでも君は一生懸命だった。自分の時間をどれだけ使っても、必死で追いつこうとしてた。

眩しかったなぁ、ホント。私じゃ到底かなわない、って思ったもん。私も演劇は好きだったけど、君ぐらいまっすぐな子を見ると、なんだか自分がまだまだなんじゃないかな、って思っちゃって」

そんな先輩のまっすぐな言葉を、当時の俺はどぎまぎしながら、今の俺は胸を痛めながら聞いていた。

まっすぐで、一生懸命。祖父が残した期待を、俺は実直に守っていた。そうありたいと願って、俺は生きていきたかった。

今の俺は、どこまでも自堕落で、どうしようもないクズだ。だからこそ、会いたくないと思ったのだから。

「だから、なんとかお父さんにお願いして、春からは普通に復帰したの。少しでも君に追いつきたくて。君の一生懸命さに負けないように」

「先輩……」

「それから引退まで、ううん、今でもずっと、君は私の目標なんだよ。だから、無駄だなんて言わないで、ね？」

驚いて固まっている当時の自分。すると先輩は、大きな荷物と一緒に持ってきていた袋から、ぬいぐるみを取り出した。

「はい、これは餞別……って普通は逆なんだけどね」

そうして手渡されたのは、先輩の手作りと思しき、フェルトでできた鶏のぬいぐるみだった。

「折角見送りに来てくれたから、お礼に。大事にしてよ？」

鶏を受け取ると、自分は少しそれを見つめた後、持ってきていた小さな紙袋を先輩に渡した。

「え？　これは……」

「あの、俺からの餞別……です。もしよかったら、その……」

そこで詰まってしまうのが悲しいかな、俺の性だった。それでも先輩は俺の意図を酌んでくれたのか、袋を丁寧にあけて、中のものを取り出した。

そこには、シンプルな装飾のネックレスが入っていた。

「これ、くれるの？」

「その、気に入ってくれたなら、是非」

せめて顔を見て言いたまえ少年、などと思いながら、甘酸っぱい高校生の自分を見る。すると、先輩はマフラーをとり、首につけて見せてくれた。

「どう、かな？　似合ってる？」

「あ、はい！　似合ってます、とても」
「ありがとう、大事にするよ」
微笑みながらそういう彼女に、漸く自分が口を開く。
「あの、先輩！　俺――」
その時、構内に響いたベルが、タイムリミットを告げた。もうすぐ電車がやってくる。
「どうしたの？」
先輩は言葉の続きを聞きたがっている。だが、一度止められてしまったものを改めて吐き出す勇気が、その時の自分にはなかった。
やってくる電車を、吹き付ける風に感じながら、やっとのことで言葉を吐き出した。
「先輩。いつか絶対会いに行きます。その時に伝えたいこともあります。だから、それまで待っていてもらえますか？」
やっとの思いで紡いだ言葉は、やっぱりあと一歩が足りなかった。だが、その時の俺には、それが精一杯だった。
どんな風に受け取ったのだろう。少し目を見開いた彼女だったが、やがて柔らかな微笑みに変わった。
「うん、待ってるよ。約束だからね」

◆◆◆

「人の意見に流されやすくて、にも関わらず中途半端は嫌いときてる。随分不器用な性格ですね」
気付けばそこは真っ白な空間で、隣にはフェルト生地の鶏がいた。
「だから、生きるためだけに仕事をしている今がどうしても受け入れられない。だが夢にはどうしても届かない。だから、今のあなたは無気力で自堕落だ」
大学受験失敗。そんな失態が恥ずかしかった。だが、演劇まで諦めたわけじゃなかった。
上京した俺は多くの劇団に足を運んだが、どこも受け入れてはくれなかった。だがそれだけをしている訳にもいかず、生活費を稼ぐためにバイトをしたが、どうしてもうまくいかなかった。
その日を生きるのに必死で、気付けば昔のことなんてすっかり忘れてしまっていた。何故この町に来たのかも、何故あんなにも無気力だったのかも。
「もう、大丈夫そうですね。貴方様がやるべきことは、もう見つかったようですから」
「ああ、そうだな」
「人の人生は長い。貴方様は高々二十三だ。まだ先は長く続いている。これからの人生、どうか悔いを残さぬようお過ごしください」

慇懃な礼を一つする鶏。なぜこいつがこんな形でいるのかも、ようやく分かった。
「……鶏の分際で偉そうにしやがって。ったく」
「こんな鶏です故、どうかご容赦を。それではこれにて」
そして立ち去っていく鶏。鶏は朝に鳴くんですからね、と苦言を呈するそのやわらかそうな背中に、ありがとう、と投げかけた。
出会いもさっぱりしていたならば、別れの挨拶も後腐れはないように。
不思議な夢の覚める時は、鶏の鳴き声ではなく携帯電話のアラームだったのは、なんとも味気ない終わり方であった。

◆◆◆

都内某所。人の行き交う街の片隅に、小さな喫茶店がある。名前は『樹』。和風な名前とは裏腹に、ヨーロッパ風のレンガ造りの外観は、お昼過ぎの人々の憩いの場となっている。
そんなカフェの一席、紺のスリーピーススーツと、同色のフェドーラを身にまとった、紳士然とした男性が一人。格好に似つかわしくないスポーツ紙などを手に、午後のひと時を過ごしている。
「すみません、相席よろしいでしょうか？」
そういって声をかけてきたのは、およそ言葉づかいが似合わないフランクな格好をした若者だ。それを咎めもせず、しかし相手もせずにずっと新聞に目を落とす男性。返事を待たずに、若者は男性の反対側の席に着く。
「叔父貴、今回もお仕事どうでした？」
「ん？　いや、大したことはなかった」
「いっつもそれですもんねー。いいじゃないですか、もう少し話してくれたって」
「他人の夢をナビゲートするなど、あまり仔細に話すことじゃなかろう」
彼らの仕事は、自堕落な人間に夢を見させて、忘れていた記憶を引き出すこと。そしてあわよくば更正させることである。
人ならざる二人組だが、その格好からはそれを判断することはできない。紳士然とした男性の落ち着きと、文句ばかり言い続ける若者の組み合わせは奇妙ではあるが、人間と見分けはつかない。
「見返りもないのにこんなことやらされて、愚痴言い合ってもいいんじゃないですかね？」
「私はやりがいを持っているし、どのみちそういう用途で生み出されたのが我々だ。諦めて従事したまえよ」
「達観してるなぁ。ところで叔父貴、スポーツ紙なんて似合わないもの読んじゃって、一体どうしたんです？」

「ん？　いや、懐かしい顔を見かけてね、つい買ってしまった」
そういって一面を指さして、若者に見せた。
「何々？　『人気俳優・石嶋浩太、舞台女優と熱烈交際』？　叔父貴、こんなのに興味持ってましたっけ？」
「馬鹿者。男のほうを昔仕事で案内したんだよ。懐かしいといったばかりだろう」
「ありゃりゃ、そうでしたか。じゃあしっかり更正できたんですねぇ」
「そうみたいだ。元気そうでなによりだよ」
そういって新聞を折りたたむと、コーヒーを飲みほして席を立つ。あわてて若者が追いかけるも、思いのほか男性の足が速く、信号に引っかかるまで若者のほうが追いつけなかった。
「叔父貴ぃ、もうちょっとゆっくり歩いてくださいよ。女の子に嫌われちゃうよ？」
「好く相手もおらんだろうに。まったく……」
青信号で歩き出す人々、そこに交じって、男性と若者も歩き出した。目的地があるわけではないが、次の仕事まではこうして町をぶらぶらするのが日課である。

その時、横断歩道ですれ違う男女。
男性のほうは活力に満ちた顔で、昔の虚ろさはどこにも見受けられない。
そして女性は明るく微笑み、その首には、シンプルながら可愛らしいネックレスが――

「叔父貴ぃ！　車に引かれますよー！」
気付けば歩行者信号は点滅しており、もうすぐ切り替わる合図を告げている。
急いで横断歩道を渡りきると、それと同時に発車する車たち。もう向こう側の人の姿は見えないが、それでも、今確かに……
「叔父貴？」
若者が心配そうな目で見てくる。それに「心配ない」と返して歩き出す。
彼のやりがい。いつかこうして、更正した人々と擦れ違うこと。向こうは決して気づかないが、彼だけが味わう幸福。それが、彼にとっての見返りだ。
懐かしい鶏の鳴き声をそっと口遊みながら、風の向くまま、ゆったりと歩き出した。

終